

天頂に描かれたキリスト

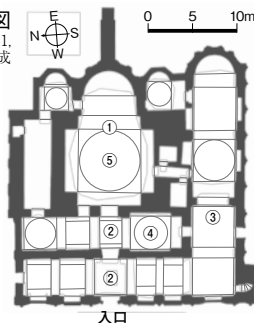
早稲田大学・非常勤講師 武田一文

ビザンツ美術史上の傑作 かつてビザンツ帝国（東ローマ帝国）の首都コンスタンティノープルであった現トルコ・イスタンブールの旧市街、その西側をふさぐテオドシウスの城壁近くにコーラ教会は建つ。コーラとはギリシャ語で「郊外」の意であり、今も昔も街はずれの当地になぞらえた名である。一方、コーラには「住みか」との意もある。聖堂内には「全て生きるものの住みか」なる銘を付されたキリスト像がある。立地に加えてキリストの銘にも掛けたのが本教会の名称となる。6世紀に建立された教会であるが、現在見る形は1316-21年の間に大改修を加えられたものである。

改修を行ったパトロン^①のテオドロス・メトキティスは皇帝に近い高官であり、当代随一の知識人でもあった。本堂（図中①）、玄関廊（②）はモザイク、附属礼拝堂（③）をフレスコで描いており、ビザンツ美術史上の傑作の一つに数えられる。帝国滅亡後、壁画は漆喰で覆われモスクとして使用されていたが、現在は漆喰を剥がし、モスク時代の名を取りカーリエ博物館として公開されている（カーリエとはトルコ語で「郊外」の意）。

キリストの図像が語るもの 教会に入ると、二重に玄関廊があり、その奥に本堂が続く。モザイクはガラスや天然石を小さく切り、漆喰の地に敷き詰めて図像を描く技法である。特に背景の金地は、金箔を挟んだガラスの小片でつくられ、ビザンツ・モザイク特有の荘厳な雰囲気を生む。これは当時であっても贅沢な技法であり、現存する聖堂は当時の帝国全土で10か所程度に過ぎない。フレスコと異なり顔料の変色といった恐れはないが、経年劣化により石が剥がれ落ちることは避けられない。コーラ教会も本堂は殆どの壁画が現存せず、往時の煌びやかな様子を窺わせるのは玄関廊が中心となる。本図《全能者キリスト》像も、玄関廊の天井ドーム（④）に描かれる。帝国内で奉じられた正教の聖堂は中央に大きなドームを頂く建築様式を取るが、規模によっては幾つか

図 コーラ教会の平面図
P. A. Underwood, *The Kariye Djami*, vol. 1, Pantheon Books, New York, 1966, fig. 1より作成



の副ドームも施工する。本堂ドーム（⑤）には《全能者キリスト》を描くのが通例であり、訪れた者を天から見下ろすような構図となる。本図は副ドームに描かれたものであるが、同じくドーム下に立つ者^{ニクス}をみそなわす。聖なる人物を示す頭光に、キリストのみは十字が加わる。「IC」^{ニクス}「XC」とはギリシャ語でイエス・キリスト IHCOYC XPICTOCを表す文字である。左手には福音書を持ち、右手は祝福の仕草を取る、典型的な《全能者キリスト》像である。天に在るキリストを象徴する本図は、ビザンツのイコンに特徴的な正面観に無地の背景で描かれ、物語性を持たない代わりに礼拝像としてふさわしい威厳を持って観者を見据える。

恐らく誰が見てもキリストである、とわかるこの姿は何によるものなのであろうか。古くは6世紀にこのスタイルのイコンが描かれているが、この姿を繰り返し描くビザンツの画家は無個性で技量のない存在だったのか。答えは否であり、彼らは積極的に同じ姿を「写して」いたのである。伝承によれば病に苦しむシリアの王に対し、キリストは自らの顔を押し当てたハンカチを送った。そこにはキリストの顔が写されており、それにより王は癒されたという。この伝承は不可視の神を描けるのか、という問いに対する答えともなった。すなわちキリストの意思によって彼の顔は残されたのだから、これを写すことは認められたのである。故に画家は、「想像」により描くのではなく、手本を「写す」ことを良しとした。こうして固定化されたイメージが、現代まで「キリスト像」として伝わるのである。

ドーム天頂にあるキリストの周囲には、壁面を畝のように区分して人物立像が描かれている。彼らは旧約聖書に現れる、アダム、アブラハムなどのキリストの祖先である。壁面は多数の人物を並べるのに好都合な形状で、観者は旧約の時代からの系譜に思いを馳せたことだろう。若くして兄カインに殺害されたアベルのみ、若者の姿を取る。キリストから^{こうほう}光芒が彼らの頭上に注がれているようにも見え、光を受け変幻する煌めきを見せるモザイク技法ならではあろう。



アベル

アダム

上段：ノア

写真提供：ユニフォトプレス